報　告

戦中期日本におけるイスラーム研究
－早稲田大学図書館所蔵「イスラム文庫」の概要と研究課題－

店田　廣文*

Islamic Studies in Japan during the World War II period

Hirofumi Tanada

Abstract

Waseda University Library has a special collection called "Islam Library". In 1938, the "Dainihon Kaikyo Kyokai " (in English, Greater Japan Muslim League) was established with the support of Japanese Military Forces for the purpose of promoting Islamic studies and creating friendly relations with Islamic nations. The above mentioned collection was donated by an ex-member of the "Dainihon Kaikyo Kyokai" after its dissolution in 1945. It includes in-house printed research papers and materials, and also handwritten papers and so on. The academic evaluation of the collection in all have not yet been done. The author introduce what is content of "Islam Library" and discuss the research agenda in the future.

早稲田大学中央図書館の特別資料室に、「イスラム文庫」注1と通称されている所蔵資料がある。これは戦前のイスラームに関する調査研究機関のひとつであった大日本回教協会（1938年結成、1945年解散）が所蔵していた協会所内資料や名簿、手書き原稿、写真資料などを含むおよそ1800点（一部、手書きの目録化ずみ）と、ほとんどが未整理の同量の資料である。これまで同文庫の散発的利用はあったものの、文庫全体の吟味や分析はなされておらず、その評価も手つかずのままである。本稿は、戦中期の日本におけるイスラーム研究や日本とイスラーム諸国注2の関係史解明にとって重要である同資料の全体概要を紹介することを第一義的な目的とするが、同文庫を利用した今後の研究課題についても言及する。

1．戦中期のイスラーム研究

日本と西アジアや北アフリカのイスラーム諸国との本格的な交流は、明治時代初期前後の遣外使節や留学生らの訪欧途上の現地体験にはじまったといえよう。その後、日本の不平等条約改正運動

*人間健康科学科　　*Department of Human Health Sciences

※本稿は、2001年度早稲田大学特定課題研究助成費（2001A-603）による予備的な成果の一部である。

や日本ナショナリズムの興隆が同じ立場を体験したイスラーム諸国への関心を呼び起こし、両者の接触が密になった時期を迎えた。しかし、日清・日露戦争を境とした日本の国際的地位の変化は、イスラーム諸国への関心のありようを、かの地の社会情勢を植民地統治の視点から把握するという帝国主義的な関心へと変容させていった。その後の日本あるいは日本人のイスラームへの関心は、第二次世界大戦終結までの軍国主義の時代にあって極めて功利的なものが主流であったと言われてきた。注3

1930年代後半から1945年までの戦中期には、大日本回教協会をはじめ、イスラム文化協会、回教圏攷究所（後に、回教圏研究所）、満鉄東亜経済調査局回教班、外務省調査部回教班などが設立され、イスラームに関する調査研究や啓蒙活動がきわめて活発におこなわれた。これらの活動には、研究者のみならず、日本人ムスリム（イスラーム信仰者）や日本在住の外国人ムスリム、政治家、実務家、軍人などが参加した。同時に、これら機関は、『回教世界』、『回教圏』、『新亜細亜』、『回教事情』などの資料も刊行したのである。いわば、この時期は「わが国に於けるイスラム研究の第一のブーム」注4であった。

上記の研究機関のうち、1938年９月に軍部の後援を得て設立された大日本回教協会は、当時のイスラーム研究の統合を意図した機関であり、最大の規模や陣容を誇っていたという。1939年の４月には、早くも協会調査部によって、機関誌『回教世界』第１巻第１号が発刊され、活発な活動を開始する。同協会会則によると、「本会は我国及国民と世界に於ける回教国及回教徒との親善融和及相互の福祉増進を図るを以て目的とす」（第３条）とあり、そのために「回教徒関係諸問題の調査及研究、文化の相互紹介、所要人材の養成、彼我通商貿易の促進其の他必要と認むる各般の事業を行ふ」（第４条）とある。こうした方針に従い、『回教圏早わかり』、『回教圏要覧』などをはじめ、『我が南洋貿易と回教徒』、『インド回教民族の動向』などさまざまな出版物を刊行する一方、回教圏展覧会を開催して、一般的な広報活動もおこなった。注5しかし敗戦とともに、協会は「その成立の事情に禍されて、終戦とともに解散を余儀なくされた」（昭和20年10月）のである。注6

この戦中期における研究ブームは、戦後のイスラーム研究やイスラーム諸国を対象とする研究の礎になったという意味では、大きな意義があった。しかし、この時期のイスラーム研究やイスラーム諸国研究については、わが国の軍事的・地政学的な関心が強調され、当時のイスラーム認識については十分に研究されているとはいえないと思われる。協会そのものの性格に関しても、軍国主義的な色彩の濃い機関では必ずしもなかったという言及も戦後なされている。注7このような諸点について、「イスラム文庫」に所蔵されている資料も利用しながら分析することは重要であろう。

なお本稿を執筆する契機となった研究計画注8では直接の対象としていないが、戦後日本におけるイスラーム研究の芽は、解散した大日本回教協会の活動のうち、学術研究面の継承を意図して大村謙太郎が発足させた日本イスラム協会に胚胎されることになる。この協会は、戦後も大村を中心に公式、非公式に活動を続け、後に宗教法人である日本ムスリム協会、後に社団法人（1968年、外務省所管）となる再建後の日本イスラム協会へと継承されることになる。注9　しかし、再建以前の日本イスラム協会は、「研究らしい研究も行うことなく十数年が経過」していたとのことであり、大村の逝去後、早稲田大学教授松田壽男の尽力で、1963年７月に再建打ち合わせ会を早稲田大学大隈庭園内の完之荘において開催し、同月20日には第一回の理事会を開催し理事長となった松田のもと再建への道を歩みだした。同年の11月には早くも機関誌『イスラム世界』の創刊号が発行された。なお、現在の日本イスラム協会の会員数は401名（2001年10月現在）である。注10

２．早稲田大学図書館の「イスラム文庫」

大日本回教協会の所蔵資料が、早稲田大学図書館に正式に所蔵されるに至った経緯や正確な時期そのものは明らかではないが、協会関係者のなかに早稲田大学関係者がいたことが所蔵に至るひとつの要因であった。1955年に早稲田大学教授松田壽男（戦中期には、回教圏研究所研究員・資料部長であったし、大日本回教協会参事であった）に、

協会の中心人物のひとりであった大村謙太郎から所蔵資料の保管に関して相談があり、当時の早稲田大学大浜総長に相談した結果、預かったという経緯が紹介されている。[注11] 戦中期の資料を緊急避難的に大学図書館に寄託したということもあるようだ。大村の逝去（1962年）後、寄贈のような形で早稲田大学図書館での所蔵が決定したものと思われる。

もちろん、早稲田大学が1945年の大戦終結までの時期に、ムスリムやイスラーム研究と全く縁がなかったわけではない。既述のように、大日本回教協会メンバーには松田がいたし、その他にも早稲田大学教員の名前もある。また1910年前後に、大隈講堂において外国人ムスリムによる講演会が開催されたり、大隈重信が彼らと親交をもったなどの歴史的事実もある。また戦後には、前述したような日本イスラム協会の再建後に、松田理事長のもと早稲田大学が事務局を担当していた時期がある（1980年まで）。このような経緯をふりかえると、最初のきっかけはともかく、「イスラム文庫」が最終的に早稲田大学に所蔵されることになったのは、自然の成り行きであったのかも知れない。[注12]

ところで、現在の早稲田大学におけるイスラーム研究はけっして盛んとはいえない。試みに、教員の学術研究状況に関する早稲田大学ホームページを使用して、「イスラム（イスラーム）」で検索すると、筆者を含めて11名がヒットし、東洋史、考古学、政治学、社会学、教育学などを専攻する研究者たちがいるが、同ホームページに公開されている研究業績を参照しても、イスラーム（イスラーム諸国の研究を含めて）研究が活発とはいえないのが現状である。世界人口の２割以上をムスリム人口が占め、ムスリムの居住する地域が200ヶ国以上にのぼることを考え、[注13] 世界研究をひとつの重要な研究領域に据えるならば、早稲田大学でのイスラーム研究はその整備が望まれる所であろう。

3.「イスラム文庫」の整理と所蔵の現況

イスラム文庫は、ある程度まで整理済みの資料と、まったく未整理の資料に大別される。前者は、３つに分類できる。第一は、図書館への寄贈資料に含まれていた図書や雑誌の類（和書、洋書を含む）である。これらは、後にほとんどが図書分類番号を付されて、分類記号別に配架された。早稲田大学図書館によって、1993年２月25日付けの「イスラム文庫　受け入れ番号　45-6100～6826」という記録が作成されており、また洋書およそ100点についても記録が残されている（いずれもワープロソフトを使用して作成したものである）。この中には、イスラーム、西アジアをはじめイスラーム地域関係の書籍をはじめ、一般書籍も含まれる。第二は、写真や乾板、書画の類である。これらについては、早稲田大学図書館がエクセルで作成した32ページにのぼる大日本回教協会関係写真資料目録がある。それによると、1277点の写真と、９点の書画、64枚の写真乾板が記載されている。第三は、協会の所内資料や名簿、手書きの原稿などがある。これらについては、「大日本回教協会関係資料目録」が作られており、これによれば、501点の資料がある。ただし、この目録は手書きであり、パソコンへの入力はおこなわれていない。

次いで、後者の未整理の資料について、紹介しよう。これらは、60×50×40センチほどの大きさの段ボール箱８個に保管されている。内容は、原稿や、手書き資料、新聞の切り抜きなどであるが、詳細については今のところ不明である。以下では、上述してきた資料の内容に立ち入って述べることにしよう。

(1) 図書分類番号を付された図書や雑誌の類（和書、洋書を含む）

受け入れ番号順に、イスラームに関わるものをいくつか拾い出してみると以下のようである。「回教世界と日本」、「コーラン教」、「回教に於ける個体」、「回教解説」、「回教圏展覧会計画書」、「支那回教徒に就いて」、「第八一回帝国議会に於ける回教問題の審議」、「回教事情」、「中央アジアの回教圏」、「名古屋イスラム教会建設の由来」、「回教を語る座談会」、「回教公認が我が国民に与える影響に就いての問答」、「時局ト回教問題」、「回教の全貌- 明日の世界勢力-」、「苦悩するソ聯回教民族」、「大東亜建設と回教徒」等々。このほかにも、多数あるが、当時のイスラーム研究の方向の一端を表

していることは間違いない。これらのなかには、大日本回教協会の出版物も含まれており、既に配架済みの資料にも協会の活動や理念を知るうえでも欠かせないものがある。これらは早稲田大学図書館の学術情報検索システムに入っており、様々な検索や利用は既に可能であり、また学外者の利用に紹介状などが必要とはいえ、一般に公開されているといってよいだろう。これらの図書・雑誌などの検索は、インターネット上の早稲田大学学術情報検索システム(http://wine.wul.waseda.ac.jp/)を通じて、誰でも自由におこなうことができる。

(2) 大日本回教協会関係写真資料目録所収の資料

ここには協会関係の写真のほかに、様々な写真資料が混在している。場所や日付の特定できないものも多いが、協会の活動を具体的にみることが可能である。これらについては、前述したようにエクセルによる基礎的なデータ入力が終わっているが、前述したシステムには未登録であり、検索などは出来ない。目録あるいはデータベースをどのように整備するかが課題となろう。この資料の利用は限定されている。

(3) 大日本回教協会関係資料目録所収の資料

ここには所内資料や手書き原稿があり、仮の整理はなされていて、研究者などの特別な条件付き利用は認められている。前述したように、手書きの目録はあるものの、情報システムへの登録に必要な基礎的データ入力はなされていない。もちろん検索などは出来ない。これら資料については、目録あるいはデータベース作成にまず着手することが課題であろう。ここに含まれている主要な資料をいくつか紹介しよう。「協会会則」、「事業計画」、「業務報告」、「業務分擔表」、「議事録」、「職員会儀儀事録」、「調査方針」、「調査部職務分擔表」、「調査事項」、「解散式訓話要項」、「評議員名簿」、「関係者名簿」等々。これらは、協会の組織や活動の実態をみるために欠かせない資料である。

なお、本稿の執筆と同時進行で、これらの資料を現在まずデータベースとして整理中である。まだ完成されたものではないが、その一部を参考資料として著者、書名、発行元、刊行年などの項目を、別表の形で掲載する。掲載順は、図書館作成の手書き目録どおりである。

(4) 未整理の資料

これについては、未だ詳細を記すことが出来ないが、前述したように、原稿や、手書き資料、新聞の切り抜きがある。ただ、切り抜きに関して、一覧したところ、地域別に切り抜きが整理されていることが見て取れた。しかし、その掲載紙などの情報が欠落しているようであり、どの程度資料的価値を持つのか不明である。

4．今後の研究課題と計画

以上にこの文庫の全体概要を紹介してきたが、最後に「イスラム文庫」を利用した研究課題と計画についてふれておこう。

まず図書館所蔵資料としての「イスラム文庫」をイスラーム研究者はじめ多くの研究者に公開し、利用の道を開くことは重要な目的である。そのため、筆者は早稲田大学特定課題研究助成を得て、2001年度から2002年度にかけて、現在未整理である資料の分類整理と、次いでデータベース化や内容の分析に着手しつつある。

もうひとつの課題は、イスラーム研究に関するものである。まず当時の日本および日本人のイスラーム認識がどのようなものであったのかという課題がある。戦中期のイスラームに対する関心は、軍国主義的な色彩が強かったといわれるが、その背景にはイスラームの学術的研究の意図もあったといえよう。しかし、その部分でいかなる成果を戦中期の研究が達成あるいは目指そうとしていたのかはあまり明らかではない。日本のイスラーム研究の科学社会学的研究を意図するとすれば、「イスラム文庫」を整理し分析することによって得られる知見をふまえ、大日本回教協会はじめ各種研究機関の活動や研究を事例として、同時期の日本におけるイスラーム研究の再評価をすることが課題である。

注1　筆者が「イスラム文庫」の存在を知ったのは、1997年である。商学部卒の校友から同文庫の整理や公開の方策を探ってほしいという依頼があったのである。その後も気にはして

別表.　大日本回教協会関係資料目録の一部

番　号	著　　者	書　　名	年　　号
1		日本回教文化協会創立趣意書並に規約	昭和11年12月
2		イスラム文化協会趣意書並に規約	昭和12年５月
3		イスラム文化協会趣意書並に規約訂正原稿	昭和12年８月
4		イスラム文化協会趣意書並に規約訂正原稿	昭和12年８月
5		大日本回教協会会則	
6	大日本回教協会	大日本回教協会会則	
7 - 8	大日本回教協会	大日本回教協会会則	昭和14年４月現在
9 - 11	大日本回教協会	大日本回教協会会則	昭和14年５月現在
12		大日本回教協会業務指針	昭和14年１月
13 - 14		大日本回教協会事業計画並豫算概要	昭和13年11月
15 - 18	大日本回教協会	大日本回教協会職員及び傭員服務規定	昭和19年
19 - 21		大日本回教協会に就て	
22		大日本協会概要改訂原稿	
23	大日本回教協会	大日本回教協会事業計画案	昭和14年６月
24	大日本回教協会	大日本回教協会事業計画	昭和14年６月27日
25		大日本回教協会事業計画案　(昭和17年度)	
26	大日本回教協会	大日本回教協会業務報告　(昭和15年度)	昭和16年６月
27	大日本回教協会	大日本回教協会人員整備費並資料蒐収費	
28		大日本回教協会本部内規	昭和14年５月30日
29		大日本回教協会本部内規	
30 - 31		大日本回教協会文書分類表	
32 - 33	大日本回教協会	大日本回教協会各種会合豫定日	
34 - 36		大日本回教協会本部業務分擔表	昭和14年７月
37	大日本回教協会	大日本回教協会本部業務分擔表　(案)	昭和15年２月
38	大日本回教協会	大日本回教協会本部業務分擔表	昭和15年２月
39	大日本回教協会	大日本回教協会議事録	昭和17年４月１日から昭和19年４月
40	大日本回教協会	大日本回教協会参考書類綴	
41		宗教団体法案綴	
42		大日本回教協会行事豫定表	昭和19年２月
43-45		大日本回教協会回教政策審議会　(案)	
46	大日本回教協会	大日本回教協会職員会議議事録	
47		大日本回教協会回教政策審議会規則	昭和19年８月
48	大日本回教協会	大日本回教協会職員会議議事録	
49-50	大日本回教協会	大日本回教協会出版物編輯方針	
51	回教世界	回教世界編輯記要	
52		天方至聖実録出版計画書	
53-55		南方回教徒向宣傳誌発行要項　(案)	昭和18年６月10日
56	大日本回教協会	大日本回教協会会務分擔表	昭和18年10月15日
57	大日本回教協会	大日本回教協会松室総務部長達示	
58	大日本回教協会	大日本回教協会総務・調査部ノ職務	昭和18年７月30日
59	大日本回教協会調査部	大日本回教協会調査部会議事録並調査部日誌	昭和14年至18年
60	大日本回教協会調査部	大日本回教協会調査部調査方針	
61	大日本回教協会調査部	大日本回教協会調査部調査方針	
62	大日本回教協会	大日本回教協会調査部構成案	昭和18年６月29日
63 - 64	大日本回教協会	大日本回教協会調査部内規	
65	大日本回教協会	大日本回教協会調査部処務内規	昭和14年４月８日
66	大日本回教協会	大日本回教協会調査部職務分擔表	昭和19年９月11日
67	大日本回教協会	大日本回教協会調査事項	昭和14年４月12日
68	大日本回教協会	大日本回教協会調査部ノ職務	昭和18年７月27日
69		大日本回教協会第一周年記念総会会議要録	昭和14年９月21日
70		イスラーム用語調査委員会記録一至一二回	昭和21年７至９月
71 - 72		回教徒留学生取扱ヒニ関スル具申書	昭和19年４月
73		回教徒有力者招致(日本来京)滞留に関する件草稿	
74		大東亜共栄圏の留日学生育成に関する意見書	昭和18年９月
75		中国要人子弟の留日教育に関する意見書	昭和18年６月19日
76		回教大学林規則案	
77	講習科	回教大学林講習科開設案	
78		回教政策審議会記録書	昭和18年至19年
79		第八十一回帝国議会における回教問題の審議原稿の残稿	昭和18年
80	回教徒	第八十一回帝国議会における回教問題の審議	昭和18年１月
81		大日本回教協会事業達成の資金募集の依頼状	昭和13年12月
82		会長交代の挨拶状	昭和17年12月
83		"四天王会長の理事、職員に対する訓示"	昭和18年７月17日
84		会長就任満二年に際しての訓示	昭和19年11月
85	大日本回教協会	大日本回教協会解散式訓話要項	
86	大日本回教協会	大日本回教協会解散式当日訓話要項	昭和20年10月15日
87		大日本回教協会解散式後記事述	昭和20年10月23日
88		日本イスラム協会業務開始ニ当リテ	昭和20年11月５日

出典：　早稲田大学図書館作成　『大日本回教協会関係資料目録』(手書き、作成年月不詳) より筆者作成。

いたが、取りかかる契機がなく時間が過ぎた。しかし10年来の友人であるカイロ在住のジャーナリスト鈴木登氏の話がきっかけとなって、同文庫の研究に取りかかろうと考えた。彼は、1900年代初期に日本に滞在したエジプト人のアハマド・ファドリー大尉の研究を行っており、同大尉と早稲田大学あるいは大隈重信との交流について、また関連する大学所蔵の資料について、何度か話し合ったことがある。その研究については、以下を参照。鈴木登「アラブはこうして日本を知った　アハマド・ファドリー伝」『アラブ』日本アラブ協会、第63号、1992.　同「非業の人　アハマド・ファドリー大尉伝　第１回～最終回(第10回)」『アラブ』日本アラブ協会、第65号～第75号（第73号には掲載なし)、1993～1995.　また関連する文献として、アブデュルラシュト・イブラヒム『ジャポンヤ』(小松香織・小松久男共訳)、第三書館、1991.　がある。同文献には、ファドリー大尉や、著者と大隈重信との交流についても記述がある。

注２　本稿で、イスラーム諸国やイスラーム社会というのは、ムスリム（イスラーム信仰者）が当該社会においてかなりの程度多数派となっている国や社会を指している。厳密な定義付けはおこなっていない。

注３　杉田英明『日本人の中東発見』東京大学出版会、1995、参照。明治期以前の、日本とイスラーム社会との交流については、以下の文献も参照。小林元『日本と回教の文化交流史』中東調査会、発行年不詳（まえがき、1975)。

注４　前嶋信次「イスラム研究ブームことはじめ－先次大戦末までの思い出」『日本とアラブ－思い出の記-（その１)』日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局、1980、20頁。

注５　松島肇『大日本回教協會の使命に就て』大日本回教協會、1939.　および機関誌『回教世界』を参照。

注６　松田壽男「発刊のことば」『イスラム世界』1, 1963.

注７　小村不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟、1988、535頁。

注８　2001年度早稲田大学特定課題研究助成(2001A-603)『戦中期日本におけるイスラーム認識と受容に関する研究』。

注９　小村『前掲書』、535-540頁。

注10　戦中期から終戦を経て再建までのイスラム協会の状況などについては、前出の杉田、前嶋、松田、小村の文献をはじめ、以下の諸文献も参照。前嶋信次「編集のあとがき」『イスラム世界』1, 1963.　嶋田襄平「松田壽男先生の御逝去を悼む」、中原道子「松田壽男先生の想い出」、「松田壽男先生年譜」、以上は『イスラム世界』20、1982.　板垣雄三「日本イスラム協会の歩みをふりかえる」『イスラム世界』44、1994.　同「知識のラターイフ（たのしみいろいろ)」前嶋信次『書物と旅　前嶋信次著作選４』平凡社、2001所収.　熊谷哲也「資料:日本イスラム協会の沿革（稿)」『イスラム世界』44、1994.また「大村謙太郎氏談話」『イスラム世界』45、1995や「徳川家正氏談話」『イスラム世界』46、1996.も参照。

注11　「座談会　日本におけるイスラム学の歩み」『イスラム世界』2、1964.

注12　「露人イブラシム氏の来校」『早稲田學報』169号、1909.　「モハメット教講演」『早稲田學報』183号、1910.　イブラヒム『前掲書』。

注13　店田廣文「イスラーム社会の人口と都市化」『世界と人口』331号、2001年10月。